

ヨハネの黙示録は、初期キリスト教会がローマ帝国からの激しい迫害にあっていた時代に記された書物です。著者とされるヨハネも、ローマ帝国に捕らえられ、地中海のパトモス島に流刑にされていました。そのパトモス島からアジア州の7つの教会に宛てた手紙が、このヨハネの黙示録であると言われていています。今日の聖書箇所は、その7つの教会のうちの7番目であるラオディキアの教会に宛てられた手紙です。

ラオディキアは商業都市として栄えた町でした。金融の中心地として、また織物の産地でもあり、更には医学の分野でも発達していた町でした。町全体が豊かだったので、ラオディキア教会も豊かな人が多かったのでしょう。またこの町は、他の町に比べれば迫害も比較的少なかったとも言われています。それゆえ人々は語ります。「わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない」(17節)と。彼らは、自分たちこそ主に祝福され、豊かな群であると自認していました。この恵まれた環境の中で、いつの間にかこの町の人たちは「自分たちの町も教会もこれでよいのだ。」と思い込んでしまっていたのかもしれない。

自分達さえ満ち足りていれば何の問題もない。イエスさまは、不快感を露わにして「あなたは、冷たくもなく熱くもない。」と言われます。この言葉は、ラオディキアの人たちの心に刺さったことでしょう。というのも、ラオディキアの北には温泉で有名なヒエラポリスがあり、また南のコロサイの町には冷たい水が湧き出ていました。そして、ちょうどふたつの町の間にあったラオディキアの川には、生ぬるい水が流れていたらしいのです。当時のことわざでは、「熱いお湯は人を癒し、冷たい水は人を元気付けるが、生ぬるい水はどちらの役にも立たない。」なんてことが言われていたそうです。

ラオディキアの教会は、手紙が書き送られた7つの教会の中で、唯一イエスさまから褒められる言葉が何も書かれていません。他の6つの教会はいずれも、イエスさまの言葉に照らして、良いところと欠けているところが語られていました。ところが、ラオディキアの教会は、何が欠けているのかいないのかを指摘できる言葉がなかったのです。つまり、御言葉が語られても、何の反応もない状態だったのです。私たちは、御言葉に反応することによって、イエス・キリストを受け入れるか、受け入れないのかの選択をすることができます。けれども、これが何の反応もなかったなら、どうにもなりません。彼らが致命的だったのは、「はい」とも「いいえ」とも反応しない心でした。これが、ラオディキアの教会の生ぬるさを構成していたのです。

けれども、ラオディキア教会には、まだ立ち返るチャンスが残されていました。イエスさまの厳しい言葉は、彼らを裁く宣告ではなく、むしろ生ぬるい信仰者を励まし、何とかして立ち直らせたいと願う主の熱い愛の御言葉だったのです。とはいえ、ラオディキア教会の病気は深刻なものでした。

イエスさまは言われます。「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」(17節)

病気の中で最もたちの悪い病気は、自覚症状がないものでしょう。ラオディキアの人たちは、自分では「富んでいる、乏しいものは何もない」と思い込んでいました。彼らは裕

福な生活をしながら、教会にもよく通っていたことでしょう。献金も十分に行っていたでしょう。ですからラオディキア教会の人たちは、自分の信仰生活は十分だと思っていたことでしょう。けれども、イエスさまは、そのような彼らの自己満足の状態に対して、「あなたがたは、みじめで、哀れで、貧しくて、目の見えない、裸の者」という重病なのに、それを自覚していない、と言われるのです。彼らが陥っていた重大な問題は、今の満足を主にあって満足しているのではなくて、物質的、社会的豊かさによって満足していたということです。つまりキリストがいなくても、別に大きな支障はないとしている心が問題だったのです。

それゆえ、イエスさまはこう言われるのです。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」(20節)と。

これが、イエスさまがラオディキア教会の人たちに願われていることです。彼らは高価な食事をして満足していましたが、それはイエスさまと共にする食事ではありませんでした。毎週教会に行って礼拝に参加していましたが、イエスさまと交わる礼拝ではありませんでした。彼らはイエスさまを信じると言っていましたが、彼らにはイエスさまが入る隙間がありませんでした。つまり、彼らの信仰生活にはイエスさまがいなかったのです。イエスさまのいない信仰生活、これが「みじめで、哀れで、貧しくて、目の見えない、裸の者」の生活だったのです。

「見よ、わたしは戸口に立って、戸を叩く。」この御言葉は、主を信じていない者に語られた言葉ではありません。「教会」に対して語られた御言葉なのです。通常、主は教会の内側におられます。ところが、イエスさまは、「わたしは、戸口に立って、叩いている。」と言われるのです。教会の外に立っておられるのです。それはもはや、教会の内側にイエスさまの居場所がなく、教会とイエスさまが離れてしまっている状態です。私たちがキリストから離れ、世に合わせながら歩んでしまう時、私たちは主イエスを教会から追い出してしまっているのです。

しかし、イエスさまは、閉め出されたのにもかかわらず、「だれでも、わたしの声聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」と、なおも主の愛を注いでくださっているのです。悔い改めるようにと諭してくださるのです。イエスさまは、私たちがそのイエスさまの声に気づき、心の内に歓迎し、霊の交わりをすることを心から望んでおられるのです。

ラオディキア教会にあてた手紙は、「勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。」(21-22節)という言葉で結ばれています。

イエスさまは、勝利を得る者をご自分の座に着かせると約束をされました。ラオディキア教会はイエスさまから非難を受けた教会であったけれども、実はイエスさまと共に御座に着く栄光ある神の民であることを示されるのです。

これは、イエスさまが必ず彼らを悔い改めに導き、イエスさまと共にご自分の座に着かせることへの意志なのです。私たちも、この世ではラオディキア教会の人たちのように、生ぬるい信仰生活を送ってしまう存在です。しかし、イエスさまは、必ずそんな私たちであっても、福音の真理を心から悟らせてくださり、主イエス・キリストと交わる喜びを味あわせてくださるのです。しかも、私たちをもイエスさまと共にご自分の御座に着かせてくださると約束してくださっているのです。